

アンプも楽器の一部 ギタリストならMarshallを鳴らそう！

エレキ・ギターを弾くなら、やはりカッコ良い音で弾きたいですよね。では、カッコ良い音を作るためには何が必要でしょうか。エフェクターも重要ですが、何と云っても一番サウンドに影響を与えるのはギター・アンプです。シールド・ケーブルを挿して電源をONにし、つまみを回せば音は出ます。しかし、カッコ良い音や自分が満足できる音を作るためには、アンプの基本をしっかりと知っておく必要があるのです。

アンプはどうして必要なの？

まず最初に、基本中の基本。どうしてギター・アンプが必要なのでしょう。エレキ・ギターが登場したのは20世紀初頭。それまでギターといえば、いわゆるアコースティック・ギターしか存在していませんでした。すると、どうでしょう。ソロ演奏では問題ありませんが、バンド演奏の中では他の楽器の音量に埋もれてしまわずよね。ギターをバンド演奏に負けぬ音量で弾く。これがギター・アンプが発明された大きな理由です。

アコースティック・ギターとエレキ・ギターを聴き比べたことのある方なら誰もが知っていると思いますが、エレキ・ギターの生音はアコースティック・ギターよりも小さいですよね。これはエレキ・ギターはアンプで音を増幅（大きく）することを前提にしているからです。アンプで鳴らすことで、初めて「エレキ・ギター」という楽器が完成すると言っても良いかもしれません。

ロック・ギターの生みの親

このように登場したギター・アンプ。今では考えられないと思いますが、当時は「いかにクリーンなサウンドのまま増幅するか？」が重要とされていました。現代のように「歪んだギターがカッコ良い！」という発想はなかったのです。そんな中、ギター・サウンドの歴史を変えたのがMarshall（マーシャル）アンプです。ここで少しMarshallの歴史について学んでみましょう。

Marshallが誕生したのは1960年のこと。ジム・マーシャル氏がイギリスのロンドンにて「マーシャル・ショップ」をスタートさせました。今では「Marshall = アンプ」というのは常識ですが、マーシャル・ショップは元々ドラムを扱う楽器店だったのです。これはジム・マーシャル氏自身が1950年代からプロのドラマーとして活躍しており、ドラムの講師を務めていたからです。しかし、楽器店にやってくるギタリストたちが新しいサウンドを求めていることを知ると、ギター・アンプの可能性に着目。数ヶ月もの試作期間を経て、1962年に初のMarshallアンプが登場することになりました。



写真1 創設者のジム・マーシャル氏（2012年に逝去）、1962年に最初のMarshallアンプであるJTM45を作り上げました



写真2 アンプ・ヘッドとキャビネットがセパレート（分割）式のアンプをスタック・タイプと呼びます。写真はMarshallのフラッグシップ・モデル、JVM410H 価格：255,000円（税抜）



写真3 同じくJVMシリーズのコンポ・タイプ・モデル、JVM210C。スピーカーまで一体型のため、持ち運びに優れているのが特徴です 価格：275,000円（税抜）

ジミー・ペイジといったMarshallの名がロック・ギタリストのカリスマがこぞってMarshallアンプを愛用。ロックの代名詞となるのに時間はかかりませんでした。現代に脈々と受け継がれているロック・ギターのサウンドは、Marshallアンプが生み出したと言っても過言ではないのです。

ギター・アンプの仕組み

では、ギター・アンプの仕組みを見ていきましょう。ギター・アンプと呼ばれる機材は、細かく見ると「プリアンプ」、「パワーアンプ」、「スピーカー・キャビネット」の3つのセクションから構成されています。

まずプリアンプですが、これはギターの基本となるサウンドを作る部分です。歪み具合を調整するGAINやトーン・コントロールに使うEQなどはプリアンプの役割の1つ。音色を作りつつ、パワーアンプを鳴らすための音量にまで引き上げるのも大切な役割です。

プリアンプで作られたサウンドは、次にパワーアンプというセクションを通り、さらに増幅されます。ギター・アンプを見ていくと、必ず「W」と書かれていますよね。これは「パワーアンプがどのくらいの音量まで増幅させるのか」ということを表しているのです。このように2段階で増幅されることで、ようやくスピーカーで鳴らすことができるようになります。このスピーカーが収められた箱のことをスピーカー・キャビネットと呼びます。

そして、この3つのセクションがどのような構成になっているかによって「スタック・タイプ」と「コンポ・タイプ」に分類されます。スタック・タイプは、ライブハウスやリハーサル・スタジオに置いてあるようなアンプ・ヘッドとキャビネットに分かれたタイプ。アンプ・ヘッドの中には、先ほど紹介したプリアンプとパワーアンプが搭載されています。そして、先ほどの3つのセクションを1台に収めたのがコンポ・タイプです。どちらかと言うと、コンポ・タイプは小型のモデルが多いと言えますが、両者は形状や用途が違うだけです。決して、どちらが優れている...というものではありません。

真空管とソリッド・ステート

音を増幅させるのがアンプの役割ですが、どのような方法で信号を大きくするかによって、大きく2つに分類することができます。

まず、1つ目が「真空管」を使うタイプです。そのまま真空管アンプやチューブ・アンプと呼ばれています。温かみのある歪みの特徴で、GAINを上げていくにつれて心地良いロック・サウンドが飛び出していきます。ライブハウスやリハーサル・スタジオに置かれているような大きなMarshallアンプはほとんどがこのタイプです。

もう一方は「トランジスタ」という電子回路を使って音を増幅させるタイプで、トランジスタ・アンプやソリッドステート・アンプと呼ばれています。真空管アンプ



写真5 チューブ・アンプは信号の増幅に真空管が使われています。温かみのある歪みは真空管ならではの

とは異なり、基本的にはボリュームを上げていっても心地良い歪みを得ることはできません。その反面、クリーン・サウンドが得意なので、エフェクターで歪ませたい場合に最適と言えます。自宅で使えるサイズの練習アンプは主にこのタイプです。

ここで、「自宅でも真空管アンプを使いたい！」と思えますよね。残念ながら、なかなかそうはいきません。真空管アンプで気持ち良く音を歪ませるためには、対応の音量を出す必要があるのです。絶対に無理ではありませんが、とても自宅で気軽に使えるものではないでしょう。とはいえ、最近のトランジスタ・アンプの中には気持ち良い歪みを得られるモデルが次々と登場しています。

自宅にもMarshallを！

部屋に行けばMarshallアンプがあるけれど、自宅で練習する時は生音...という方は少なくないのではないのでしょうか。冒頭でも触れましたが、やはりギター・アンプで鳴らすことで、初めて「エレキ・ギター」と言えます。生音で弾いても気分は上がりません、面白くありません。それだけではなく、アンプで鳴らした時にどのようなサウンドになるのか...特にピッキングのニュアンスは生音ではわからないので、生音でいくら練習しても、あるレベル以上は上達することが難しいと言えます。

部活やライブでMarshallアンプを使うなら、自宅でもMarshallアンプを使って練習したいところ。モデルやサイズ、形式は違っても、MarshallはMarshallです。サウンドの傾向は似ているので、自宅と部室での音の違いを最小限に抑えることができるほか、自宅で試してみたエフェクターの設定などをそのままバンド練習に反映させることができるのです。

Marshallからは様々なサイズのアンプが発売されていますが、その中でも自宅練習にオススメなのがMG15CFXという15W出力のモデルです。MGシリーズはアナログ・アンプのノウハウと最新のデジタル技術を融合させて完成した、Marshallならではのソリッド・ステート・アンプ・シリーズ。同シリーズにはもっと小型で低価格なモデルもラインアップされていますが、このMG15CFXから搭載される機能がすごいのです。

例えば、クリーン、クランチ、OD1、OD2という4つのチャンネルを搭載している点です。クリスタル・クレーンからヘヴィ・ディストーションまで、Marshallアンプの魅力が凝縮されています。さらに、エフェクトも搭載。サウンド・メイクに必須のディレイや心地良いコーラス、フェイザー、フランジャーまで、4種類のエフェクトがつまみを回すだけですぐにセッティング可能です。なお、別系統でリバーブまで搭載するという本格仕様になっています。

そして、エフェクトを含むすべての設定がメモリー可能。気に入った音色やよく使うセッティングをチャンネルごとに保存しておけば、スイッチ1つで瞬時に呼び出すことができます。これまで高級モデルでしか成し得なかった最先端の技術を手に入れることができます。

その他にも、携帯音楽プレイヤーなどを接続して、お



写真5 MGシリーズのコンポ・タイプ・モデル、MG15CFX。スピーカーまで一体型のため、持ち運びに優れているのが特徴です 価格：オープン（実勢価格：16,000円/税抜）



写真6 Micro AmpのMS-2。こんなに小さなミニ・アンプにもMarshallの名が冠されている。サイズは140(H) x 110(W) x 60(D) (mm) 価格：6,800円（税抜）

気に入りの楽曲に合わせて演奏できる外部入力端子やヘッドホン端子も備えているので、夜中でも安心して練習できます。サウンド・クオリティやトーン・パリエーション、使い勝手、価格...と、どれを取っても最高のチョイスになってくれるはずですよ。

サウンドはアンプで作れ！

最後に、サウンド・メイクについて考えましょう。今や、ものすごい数のエフェクターが発売されており、多くのギタリストが何かしらのエフェクターを使っていることでしょう。しかし、エフェクターが進化するほど、それらに音作りを頼ってしまいがちになるのではないのでしょうか。確かに、歪み系エフェクターを使えば簡単にディストーション・サウンドが得られます。しかし、やはりエレキ・ギターの音作りの基本は「アンプ」なのです。

というのも、最終的にギターの音が出るのはアンプです。ギターとアンプだけで基本となる音作りができなければ、そこにどんなエフェクターを使おうと良い効果は得られません。もしかすると、かえって音やセッティングの原因になってしまったり、アンプの設定によってはエフェクターのポテンシャルを引き出せていない可能性も十分に考えられます。

それを防ぐためにも、まずはギターとアンプだけでしっかりと音を作り、それだけでは補えない要素をエフェクターで加える...。そのようなイメージで音作りに臨むことが大切です。

ギター・アンプを知り、使いこなすことで、ワンランク上のサウンド作りができるようになります。